

令和 6 年度第2回 静岡市図書館協議会会議録

1 日 時 令和 7 年 1 月 17 日 (金) 午前 10 時～12 時

2 場 所 静岡市藁科生涯学習センター 2 階 ホール

3 出席者 (委員) 那珂会長、豊田副会長、伊澤委員、加藤委員、清俊之委員、清尚子委員、宗野委員、堀川委員、森委員
(事務局) 本野教育局次長、望月中央図書館長、伊藤中央図書館副館長兼管理係長、照内中央図書館サービス係長、高田御幸町図書館長、田島西奈図書館長、田中藁科図書館長、石川北部図書館長、佐藤南部図書館長、内田長田図書館長、鎌田清水中央図書館長、杉山清水興津図書館長、杉山蒲原図書館長、川口中央図書館麻機分館主査(再)、下嶋中央図書館美和分館主任主事、井柳中央図書館サービス係主査、坂下同主査(再)、大橋同会計年度任用職員

4 欠席者 (委員) 千頭和委員

5 傍聴者 3人

6 議 題 (1) 電子図書館について
(2) 市民意識調査について
(3) 将来ビジョンについて
(4) その他

7 会議内容

(1) 電子図書館について

(2) 市民意識調査について

那珂会長 本年もどうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、議題1「電子図書館について」と議題2「市民意識調査の結果について」をまとめてご報告ということですので、ご意見、ご質問につきましては、報告が終わった後に伺いたいと思います。まず電子図書館の利用状況についてからご説明をよろしくお願いします。

事務局（サービス係長） 本日は、9月から開始された電子図書館と小中学校の連携サービスの状況と、全体的な電子図書館の利用状況についてご説明します。お手元の資料「電子図書館の現在の状況について」をご覧ください。

まず、資料の左側、「1 学校連携の状況」をご覧ください。前回の図書館協議会でも説明しましたが、市内の静岡市立小学校、中学校の児童・生徒、教職員全員に、電子図書館のみ利用が可能な専用IDを附番し、学習端末から「しずおかし電子図書館」が利用できる連携事業を、9月から開始しました。附番した児童・生徒数は、小学校は87校で約3万人、中学校は43校で約1万5千人です。

「(1) ログイン状況」についてですが、9月から11月の3か月分を表にまとめてあります。この数値は電子図書館を知った、興味を持った人数と、その人たちが何回電子図書館を開いてくれたのかを表すものです。貸出数についてはあとで説明します。

連携を開始した9月は各学校での説明もあってか、ログイン回数もログイン実人数も多くなっています。10月、11月は落ち着いてきており、大きな変動はありません。ログイン回数については、いまだ0回の学校が、小学校で11校、中学校で16校あります。また、10月、11月のログイン実人数は、およそ小学生が7,600人、中学生が1,100人です。これは、専用IDを配布した児童・生徒のうち、小学生は25%、中学生は7%くらいに相当します。

今後はこれらの数値をもっと改善すべく、ログイン回数が0の学校への利用勧奨や、実際に使ってみた感想を学校に聞いた上でのサービス内容の検討など、教育センターとも連携して利用の促進に努めてまいります。

「(2) 利用状況」をご覧ください。資料ごとの【閲覧回数】は、記載のとおりです。静岡資料については、小学生、中学生ともに、授業での利用の有無で閲覧回数が増減していると思われます。

【時間ごとのログイン回数】はグラフのとおりで、朝8時台のログインが圧倒的に多いことから、朝読書や朝自習等の時間に活用されていることがうかがえます。また、9時から15時台までのログインは授業での利用であると思われます。

「読み放題」という資料には、小説やおはなしなどの読み物のほか、知識を深められる科学的・社会的な読み物や、調べ学習に使える本など様々な本が入っていることから、ジャンルにとらわれることなく、子どもたちが自由に本を選ぶことができるよう今後も所蔵を継続していきたいです。

学習用端末を使った電子図書館の活用については、まだ始まったばかりのため分析等はこれからですが、今後も学校側の意見を聞きながら、効果的な取り組みになるよう検討を続けていきます。

次に、資料の右側、学校連携を除いた電子図書館の利用状況についてご説明します。

【年代別実利用者数(貸出者数)】の表をご覧ください。表の下に記載のとおり、20代までは、0～6歳が未就学児、7～9歳が小学校低学年、10～12歳が小学校高学年、13～15歳が中学生、16～18歳が高校生、19～22歳が大学生、23～29歳が大学生以上で区分しています。

現在、電子図書館を利用している主な年齢層は、30代から60代までです。今後、この層が年を重ねても利用を継続してもらえれば、自動的に70代以上での利用も高くなることが見込まれます。7歳から15歳の小中学生については、学校連携を通じて電子図書館を知ってもらった上で、一般の図書館カードでも電子図書館を利用してもらい、ひいては10代・20代の利用促進に繋げていければと考えています。

【時間ごとのログイン回数】及び【資料ごとの貸出・閲覧回数】は記載のとおりです。ログイン時間が最も多いのは12時台で、会社の昼休み等に利用している人が多いことがうかがえます。それ以外の時間は、深夜から明け方を除いて満遍なく利用されています。

貸出や閲覧については、9月以降、学校連携を機に閲覧を開始した「読み放題」が一般の人にも読まれている印象があります。図鑑等もあり、同時に多くの人が読むことができるので、一定の利用につながっていると思われます。

今年度の電子図書館の目標として、年間貸出・閲覧点数を20,000点以上としていました。これは、購入できる資料の見込点数や更新頻度から設定したものです。11月末時点で、貸出・閲覧点数の合計が21,529点です。すでに当初の目標は達成しています。

今年度の目標は利用者の傾向をつかむ前に設定したものでしたので、来年度については、今年度の実績を加味した上で、目標とすべき項目や数値などを設定していく予定です。また、電子図書館の目的のひとつが、今まで図書館を利用できなかった人にも読書を楽しんでもらうということでした。この目的の達成度については、年度末に実施する電子図書館の利用者向けアンケートで確認する予定ですが、現時点では、図書館が閉館している夜間にもログインが多いことから、一定程度の効果はあったと推察しています。現在は、新刊50冊ほどを月に2回のペースで購入しています。新刊は受け入れと同時にほとんど貸し出され、予約がついている状況ですので、まずは来年度以降も購入冊数やペースを落とさずに電子書籍の充実を図っていこうと思います。

那珂会長 引き続きまして、静岡市広報課が実施しました市民意識調査の結果の報告をお願いします。

事務局（サービス係長） 昨年6月に市として実施した市民意識調査に「読書習慣と図書館の利用について」という調査を掲載しましたので、その結果を一部抜粋してご説明します。お手元の資料「市民意識調査の結果について」をご覧ください。なお、調査結果の全文は、近日中（1月20日頃）に、静岡市広報課のwebページに掲載予定です。

まず、この市民意識調査の概要を説明いたします。この市民意識調査は、毎年、静岡市広報課が実施しています。静岡市在住の18歳以上の市民を無作為に3,000人抽出し、調査表等を郵送で配布しています。令和6年度の回答方法は、郵送またはインターネットによる回答で、回答者数は1,353人、有効回収率は45.1%でした。

図書館では5年に1度、「読書習慣と図書館の利用について」と題して市民意識調査の1項目として調査を実施しています。質問内容は、定点観測的に毎回する質問と、その時々で調査すべき内容の質問があります。本日は、5年前と同じ質問の回答と、令和6年度の調査で新たにした質問の回答について、ご説明いたします。

それでは、資料の左側、中段、「1 前回（令和元年度）調査との比較」をご覧ください。

『(1)あなたは過去1年間に、静岡市立図書館をどのくらい利用しましたか』という質問に対し、1度でも利用したことがあると答えた方が、令和元年度は38.9%、令和6年度は32.5%で、6.4%減少しました。反対に、利用しなかったと回答した方が、令和元年度は59.7%、令和6年度は65.4%で、5.7%増加しました。また、『(2)あなたが一番利用した図書館を教えてください』という質問に対し、回答は表のとおりでした。

(1)の全体的な利用率の減少の原因、および(2)の各館の利用率で中央図書館の割合が減り、清水興津、蒲原図書館の割合が増えている原因について、確たるものは分かりませんが、大きな一因としてコロナ禍による行動制限があるかと思われます。

また、令和6年度の調査のタイミング的に、藁科図書館の大規模改修による休館期間が重なり、藁科図書館の利用率が減少し、代わりに周辺の西奈、北部、長田図書館の利用率が上昇した可能性があります。

次に、『(3)図書館を利用しなかった理由は何ですか』という質問に対し、回答は表のとおりです。他にも回答の選択肢はありましたが、令和元年度も6年度も、上位の選択肢はこの6つでした。「借りる必要がない」「図書館に興味がない」という方々へのアプローチは困難で、ハード面での改善もなかなか難しいですが、機会があれば逃さず改善できればと思っております。

次に、資料右側の一番上、「2 令和6年度の調査で新たに質問した内容について」をご覧ください。

『(1)あなたは過去1年間、書籍をどのくらい読みましたか』という質問に対し、回答は表のとおりです。この質問の意図は、図書館に来る来ないは別にして、本はどれくら

い読まれているのか、また電子書籍がどの程度浸透しているのかを知りたいということがありました。

資料に記載していませんが、年代ごとの回答の内訳がありまして、電子書籍については、10代から40代は25%以上の人が1冊以上読んだことがあると回答しています。ただ、資料の左上に表を掲載しましたが、回答者の内訳で50代以上の割合が多いこともあり、全体的な割合は表のように0冊が圧倒的に多いという結果になりました。

『(2) 静岡市立図書館のサービスで充実してほしいことは何ですか』という質問に対し、上位に選ばれた選択肢は資料のとおりです。この質問は図書館の利用の有無に関係なく回答してもらっていますが、市民一人ひとり、図書館に求めるものが違うことが分かります。

この協議会でもたびたびご指摘いただく高齢者向け講座」が2番目に高い割合です。今後、各館一層、充実させていければと思います。

4番目の「Wi-Fi 環境」については、普段から利用者に求められることが多いので、可能な限り整備できればと思います。

昨今、図書館界で話題になる「会話ができる環境」についても聞きましたが、今回の調査では「静かな環境」が16.4%で3番目、「会話ができる環境」が6.7%で11番目でした。両立できるに越したことはないと思いますが、現状からすぐに対応することは難しいので、機会があれば対応したいと思います。

『(3) あなたがその図書館、資料左側の(2)で回答していただいた図書館ですが、そちらを利用した理由は何ですか』という質問に対し、回答は資料のとおりです。10代の回答者が少ないため、今回の調査結果は資料のとおりですが、実際は、自習ができる席があることや、学校から近いことを理由に図書館に来ている利用者はこの割合より多いと思われます。蔵書の数と種類が充実していることが理由になることはもちろんですが、家から図書館が近いことも図書館にとっては重要な要因であることが分かります。

『(4)』では、移動図書館について聞きました。今後の図書館サービス全般を考えるにあたり、移動図書館の在り方についても検討する必要があるため、今回質問をしました。＜移動図書館に対する意見＞として自由に記載していただいた意見を抜粋して掲載しましたが、圧倒的に多かったのは下2つ、「移動図書館がいつ、どこに来ているのか知らない・分からない」「もっと宣伝してほしい」という意見でした。移動図書館が訪問していない地域の方々が知らないのは仕方がないかと思いますが、訪問している地域にはもっと宣伝していければと思います。そのほかでは、高齢化社会であること

や、書店が減少していることを受けて移動図書館の活躍を期待される意見が多かったです。

『(5)』は電子図書館について聞きました。この調査を実施した令和6年6月は、電子図書館開設から3か月ほどの時期でした。開設に伴い、市広報紙や図書館の SNS、web ページ、ラジオや新聞等、様々な手段で周知をしましたが、認知度は低く、80.9%の方が知らないと回答しました。今後は危機感を持って電子図書館の認知度や利用率が上昇するように努め、次回の調査では、改善された結果を確認できればと思います。

この市民意識調査は、図書館利用者以外にも質問ができる大変貴重な機会です。今後も調査が継続されるのであれば、図書館として必要なことを聞いていきたいと思っています。各図書館に対するものや図書館全般に関する自由意見もあわせて、今後の図書館運営の参考にしていきたいと思っています。

那珂会長 ただいまのご説明、議題 1 の電子図書館、議題 2 の市民意識調査につきまして、ご意見、ご質問等をお願いします。どなたでも構いません。挙手をしていただければと思います。

宗野委員 最初の電子図書館の現状のところで、ログイン回数がゼロの学校が複数ありましたが、図書館側からの積極的なアプローチが必要なのか、それとも学校側が何か改善しないとゼロがなくなるのかわからなかったもので、教えていただけますか。

事務局（サービス係長） こちらから全ての学校に説明は届いているはずですが、学校側で使うか使わないかということのご判断だと思います。時間の関係ですとか、先生方の優先順位みたいなものもあるかと思いますが、まだ各学校に理由をお伺いできていないので、確認はしていきたいと思っています。小規模校や山間地の学校で使われてない傾向が少しありますが、もう少し様子を見て確認してみたいと思います。

清俊之委員 学校関係なので、ここで発言しないとですね。今の回答のとおりだと思います。学校は新しいものが入ってきたときに、動き出すのがちょっと緩いところがあります。前回も話題になりましたが、タブレットが導入されて 5、6 年経ちますが、そのときも 1 年、2 年、3 年はこういう傾向がありました。利用を進めていくのは行政の立場の方でプッシュしていただくことと学校側もそれを活用を。そのためにやっぱり手を入れていかないと、このままが続く可能性があるので、活用の具体例や活用する良さ、今総合学習で「静岡学」で静岡について学ぶことを小中学校でやっていますので、「静岡に関する資

料でこういうものがあるよ」っていう、「ここを見るといいよ」じゃなくて、「ここを見るとこういうものがある」ともう一歩踏み込んだ具体を示していくと、触り始めますね。ですので、ここがやっぱり踏ん張りどころかな。自分の学校の結果でちょっと不安を感じていますが、担当者が呼びかけていましたので、大丈夫だと思って図々しく発言をしています。そうですね。プッシュしていかないと離れていってしまう。

自分が気になったのは、最初に触ったところから減っていくという傾向が、それが中を見て離れてしまうということを防ぐには、やっぱり更新していったり、資料の活用を促していくような、学校は年が明けてタブレットの持ち帰りを一気に進めています。今までは持ち帰りは各学校に任されていたのですが、一気に静岡市内の小中学校全校が家に持ち帰って、また学校へ持ってきてと回転を速くしたのです。各教科や各学年に任せているものを全校が持ち帰るように、動きが速くなったので、それもチャンスだなと思います。ですので、ログイン回数の時間が夜に入ってくるのは、そういった持ち帰りの状態があったりすることもあるのかなあと思ったり、タブレットの活用は10時までという線が出ています。そんなところを含めると、やっぱり踏ん張りどころかなと思います。

端的な答えは、学校は新しいものを受け入れるのが緩い。

那珂会長 新しいものは取り入れた結果の予測ができなく、難しいところがありますので、ご意見をいただいたように、具体的な活用事例を一つでも二つでも、それぞれ学校でこういう活用をしているよという事例を図書館に報告してもらい、それを図書館のホームページ等で見せていただくと、イメージが湧くのかなあと思います。

今、「静岡を知る」という総合学習の取り組みを行っているということでしたけれども、私は昨年度からデジタルアーカイブの資格勉強を始めました。ランクが下から上まであって、一番上はなかなか難しいですが、下の方のランクの準デジタルアーキビストという資格の試験を受けまして、無事に準デジタルアーキビスト認定書みたいなものをもらいました。さあこれからそれをどうやって活用していくのかで、今悩んでいるところですが、いろいろ受けた研修の中で、それぞれの学校が様々な探究学習で、デジタル化された地域の文化資源、地域資源、あるいは郷土資料などを、もちろん教科書と併用をするっていう形ですけども、積極的に活用しているという様々な事例を勉強しました。やっぱりこういった事例があるということ具体的を知って初めて、こういう形で取り組めるのならうちもやってみようという、次の行動に繋がっていくと思いますので、まずは活用されている事例を知る、図書館側からすれば、知っていただくということになっていくのかなあ。今お話をお聞きして、デジタルアーカイブの活用についても、プラットフォームはできているし、コンテンツももうかなり充実しているけれど、それがうまく使われていないという現状にあるっていうところから、いかに使ってもらうのかの工夫の一つとして、学校の

授業での活用、そういった取り組みの事例をいくつか研修の中で知りましたので、そこを手がかりに私としては何かやってみようかなという気持ちになりましたということ、今思い出しましたので、報告させていただきます。

それでは、市民意識調査の結果についてもよろしくお願いします。

清尚子委員 12月27日静岡新聞の「読者のひろば」に、85歳の女性の方の「足が悪くなって、南部図書館へ行くことができなくなって、移動図書館を利用したら、すごく読書も増えたとし、相談も受け付けてくれる」というとてもうれしい記事がありましたが、これからは移動図書館をもっとアピールして、地域にいる家の中にいる人、少し歩けば行けるという人がいると思うので、その人たちに活用してほしいと思いました。

知っていた人が新聞に書いてくれて、「読書ってこんなに素晴らしい」「本は人を選ばない」「若い人でも年寄りでも85歳過ぎてもこんな風に楽しめる」ということを、みんなにアピールしたいという気持ちがすごく伝わってきて、いいなと思いました。

事務局（サービス係長） その記事は館内でも話題にしました。特に移動図書館担当者は喜んでおり、とてもありがたいと思いました。

豊田副会長 移動図書館の話がありましたけれども、私は3年間静岡市の移動図書館で担当していましたので、心情的にはそうだなと思ってます。同時に移動図書館に対する意見の中に「老人ホームや幼稚園などを中心に展開してほしい」と書いてあったりしますが、私が出していた30年前とは生活時間が当然大きく違って、やっぱり人の暮らし方も変わってくるし、それにつれて適当なサービスのあり方も変わってくるので、そういう意味では、移動図書館は使い方を割と機動的に変えていくことも可能な形態なので、いろいろと新しい使い方を模索していくのも大事ではないのかなあと思っています。それこそ、移動図書館は他の町ではどんどんなくなっていく傾向が強いので、それだけに上手な使い方を模索してってもらえればなと思います。後で将来ビジョンのところで、その辺のお話もできればなと思います。それが一つ。

それからもう一つは電子図書館の方に飛びますけれども、学校での利用とそれ以外の2に書いてある利用等を見ていくと、大雑把に言うと電子図書館の利用というのは、学校等での利用が圧倒的に多いというか、大部分占めているというような理解でいいですか。

事務局（サービス係長） 右側の数値は、左側の数値を除いています。左側の部分は学習端末からの利用なので、全体的に見るとそちらの方がボリュームとしては大きいです。

豊田副会長 どうしても電子図書館というときに右側を見ると、こんなに量が少ないなっていうふうに思うんですよ。私自身、最初の頃ちょっと利用しようと思ったけど、やっぱり実際に利用できるものが自分の使いたいものと一致しない。一致しているものは圧倒的に借りられている。それで最初アクセスしてみるけれども、やっぱりということになる。それは非常に理解しやすいことだと思います。投入しているリソースが非常に少ないので、どうしようもない話だと思います。これは前の会議でもちょっとお話したと思いますが、少ないリソースを、予算とか資料費を有効に使うために、どこへ向けて使っていくのか、誰に向けてどういうサービスをしているかを絞り込んでいく必要があると思っています。

学校がやっぱりそういう意味では、今までの流れでいくと、今、資源を投入していくべき場で、先ほど学校でもっと使われるようにするお話がいろいろあったので、それを進めただけであればいいなと思います。多分次の段階を考えていくと、小学生、中学生が当然成長していくわけですね。次に一つは高校に入っていく子たちをどうするのっていう話と、それから小学校、中学校ですけれども、静岡市立以外はどうかという話が出てくるのかなというふうに思います。

だから、今、非常に利用されているところを基礎にして、それを少しずつ広げていく。使われ方も、さっき那珂会長がお話されたように、例えばアーカイブとうまく連携していくとか、あるいは紙の本と電子の本をどういうふうにして抱き合わせて使われるようにしていくとか、そういった方向で、現によく使われているという実態を生かしていくというようなことを考えていく必要があるのかなと思います。

那珂会長 限られた少ないリソースをどのように拡張していくのか、それを土台にしてどのように進めていくのかというお話だったと思います。ネガティブな要素、マイナスの要素を見れば、どこまでもしょうがないよね、できないよねという発想になってしまうかもしれないけれども、現にうまくいっている、うまく読まれている層があるわけですから、そのポジティブなところを発展的に考えてみるというところが、それこそ踏ん張りどころというところでは大事なところかなと思います。

私は、誰に提供していくのかということに加えて、どのようにアピールしていくのかというところも大事な点だと思います。図書館の資料費は、電子書籍だけでなく、紙の図書の資料費というのはだんだん限られてきているというのが現状です。また新しい本もなかなか更新ができないというもどかしさも多分あると思うんですけれども、だからといって既に図書館が所蔵している本を、利用者が全部読んでいるとは当然思えませんし、読んだことのない本がまだまだ図書館には眠っていると思いますので、ここをどうやって今現在の利用者、それから潜在的な利用者にアピールしていくのかというのは、やっぱりその間に人が入らないといけないのかなと思っています。図書館であれば、司書

の方、職員の方、学校であれば学校の先生、あるいは図書館の司書というところで、うまくその本を利用者にアピールしていく人、ここもとても大事なことで、そういった人の人材育成とまで大げさなことは言いませんが、そういった観点も重要なのかな。もっと専門的な言葉で、レファレンスのところですね。そこは一つあるのかなあと思います。

せっかく電子図書館の利用実態だとか、市民意識調査だとかやっているのだから、これをうまく図書館でのレファレンスに生かしていけば、今以上に少ないリソースを活用していけるのではないかと思います。

ちょっと時間を押しているのだから、ご意見がなければ、次の議題に移らせていただきたいと思っています。また後でご意見ある方は、協議会が終わった後に個別にご質問ご意見をいただきたいと思っています。

(3) 将来ビジョンについて

那珂会長 それでは、次に議題「将来ビジョンについて」ご説明をお願いいたします。

事務局（中央図書館長） この件は中央図書館館長、私望月の方からお話をさせていただきます。

第1回の会議の中でも、今年度、将来ビジョンを頑張っていくというようなお話をさせていただきまして、今、職員でプロジェクトチームを作った状況でございます。まだ明確な形にはなっておりませんので、本日のこの会議は、目に見えるものの提供というのにはございません。それは全く申し訳ないと思うんですけども、代わりに資料を用意させていただきました。

3-1ということで、1枚両面刷りが3枚1セットになっておりますが、うちが作るにあたって参考にさせてもらっている他都市のものの目次の部分といいたほうがいいかと、項目だけということで用意させていただきました。都市の規模ですとか、あるいはその自治体で持っている図書館の数が静岡市に近いところ、あるいはこれってちょっと面白そうだなというようなところを参考にもらったのが、お手元の堺市、福岡市、豊橋市のものがございます。こんな形で項目だてをしてまいりたいと思っております。

ボリューム感としては、一番上の堺が39ページぐらいなのかなと想定できますが、それに近い形、ボリューム感で仕上げられたらいいなとは考えております。

今日この場で特段お示しすることもなく、議論の俎上にもまだ上げられないことは全く申し訳ないんですけども、それでも皆さんからのご要望等があれば、ぜひ伺いしたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

那珂会長 将来ビジョンはなかなか簡単に作成できるものでもございませんが、おそらく図書館の中で職員レベルでは、いろんな話し合いだとか、意見交換がされてきていると思い

ますので、僕の意見ですけれども、今度はちょっと外に向けて、協議会の中ではなく、協議会の前の段階でも、いろんな外の方を入れたところでの意見交換、そういったものができれば、より現実的なというか将来ビジョンというもののイメージができてくるのかなと思っておりますので、図書館の中でいろいろ意見交換されているものがあれば、基本計画の形にするのはまだ先だと思いますが、こういった意見が出ているよっていうところはいろいろ知りたいという気がします。

その上で将来ビジョンにつきまして、皆様方のご意見、将来ビジョンですからこういう図書館になってもらいたいといういろんなご意見があると思いますので、よろしくお願いします。

堀川委員 前回のときに今の話が出まして、私もそんなにすぐにできるとは思っていませんが、具体的にどういう工程で、いつ頃までに、このような手順を踏んで作っていきたいぐらいのことは、少なくとも次回の協議会で出していただきたいと思います。今館長がおっしゃったように、市民の意見を聞くというような工程を入れたり、職員でプロジェクトチームを作ったということですので、プロジェクトチームの進捗状況ですとか、それをある程度示す形というのを次回のときにはお願いしたいと思います。1年なのか2年なのか、出来上がりの完成をどの辺に目標を置くのかということもあると思いますので、それを踏まえた上で、どういう工程で作っていくのかあたりを示していただきたいと思っています。

豊田副会長 先ほど那珂先生がこういうことを学んでいます、資格を取るという話をされていましたが、私の仕事は元々いろんな自治体の図書館関係の計画を作るのを支援することですが、その中で生成AIですね、チャット GPT を使うっていうのは、仕事の中で比重がかなり高くなってきている。ここ1年くらいはわりとそちらの方をいろいろ勉強して試してみたりしています。本当に赤ちゃんが成長するように、数ヶ月経つと性能がアップしているので、本当に油断ならないですが、昨日「静岡市立図書館の未来について」ということで、ちょっとチャットGPTとやりとりしたら、30分ぐらいで20ページぐらいに作ってくれたので、もちろんすぐ使えるというような話でもないと思いますが、非常にレベルが高いものができてしまいます。外からいろいろな方の意見を聞くのも大事だし、そういうような旬の手法を使うのも必要なのかなと思うので、それは私ももし聞かれるとできるだけこういうふうに使うといいですよ、とにかくお金がほとんどかからないので、それはぜひ使い方を考えていただいて、上手に使うと非常にはかどるはずですので、そういうことを一つご提案したいというのがあります。

それから、私がいろいろ聞いてチャット GPT が答えてくれたなかで、これはいいな、ちょっとやってみたらいいのではと思ったものをご紹介します。

今は人口がこういう風に変わるというのはわかっているけれども、それ以外のことは非常にやっぱり予想しにくい時代になっているわけですね。よくブーカの時代、VUCA と書きますけども、非常に変動が激しくて、不確実性が高くて、複雑にいろいろな要因が絡まっていて、しかも曖昧なことが多い時代にあるというようなことで、計画も非常に作りにくくなっているというのは間違いないです。作るのは簡単かもしれないけれども、でもそのとおりに世の中が動いていくかどうか正直全然わからないという状況があります。かえって計画が足かせになってしまう可能性も高いという、そういう困った状況だと思います。それこそコロナみたいなこともありますしね。

そういうときに何をやったらいいのだろうかっていうことで考えると、新しいことをあらかじめばっちり予想していくというよりは、何かいろいろな新しい動きが起きてきたときに、その条件を素早く使って創造的にクリエイティブに対応できるような仕組みを作ることが、非常に重要なのかなと思っています。

チャット GPT いわくになってしましますが、三つのアイディアがあります。簡単にいいますと、一つは図書館未来ラボを設置すると彼は言っていますが、図書館サービスのイノベーションを目指す専用チームを立ち上げて、そこでいろいろなトレンド調査とか、実験をできる仕組みを作って、実験をやったらこうなりましたということをオープンにしていこうという、そういうやり方が一つ必要なんじゃないのということ。それから、地域住民や企業と共創する。共に何かプログラムを作っていくというそういう仕組みを作った方がいいということですね。さっき計画を作る中で外の意見ってありましたけど、新しいサービスやプログラム、こういうのをやったらどうですか、提案をどんどん受け付けて、それを実行していくっていうことですね。

それからもう一つは図書館員のスキルアップキャンペーンというふうに考えているんですね。1 年間の重点研修プログラムみたいなものを実施して、新しいサービスに必要な知識を習得しましょうということですね。

ここからが私のオリジナルですが、この三つは実は一つにできるということですね。つまりいろいろな市民や企業からのプログラムを出してもらって、それを素材としてラボの中で実験を可能にすると、それ自体を図書館員のスキルアップの研修プログラム、アクティブラーニングですね、そういうプログラムにする。こういう方法がとれる。計画を頭の中でいろいろ考えてやるのもいいですが、それはチャット GPT が結構うまくやってくれるので、それよりは実際に試してみる仕組みを早く立ち上げた方がいいということですね。

私もそちらの方もいろいろどちらかという動く方が得意なので、お手伝いできることもあると思いますし、それこそ今、学校の教育の部分は普通にアクティブラーニングみたいなものがどんどん盛んになってきていますので、教育関係の中でもそういうこと得意な方いらっしゃると思うので、そういった方の力やチーム、もちろん大学院でもやってらっしゃいますから、そういうものを借りながらやっていってはどうかということを書かせていただきます。

那珂会長 生成 AIは僕も使っています。授業の計画を入れれば作ってくれますが、僕よりも賢いので、僕が喋れない内容まで作ってくれるので、僕が使っているのは、頭の中で考えていることを一旦生成AIに読み込ませて、そうすると、意外と綺麗にまとめてくれます。最初の僕の話に戻ってしまいますけれども、図書館の内部でいろいろ検討されていることもきちとした文章じゃなくて構わないので、勝手にバーっと入れて、さあ自分たちは何を考えているのかなあというのを生成AIに作ってもらくと、意外ときちと整理されたものが出てくるので、次にステップします。だから今、おっしゃっていましたが、最初に頭で考えたことを整理することは、意外とこういう新しい技術でできてしまうので、あとは我々がやらなければいけないのは、それを基に実行していくってということなのかなあと思います。実験というお話でしたけれども、まずは事例をこう積み上げていくというところで、自分たちがここまでだったらできる。やってみたら、ここができなかったから、自分のできるような形に修正してみようとか、そういう実験ですよ。その繰り返しがあると意外と図書館の方の自信もつきますし、それこそスキルアップにも繋がっていきますし、自信ができれば、利用者の方にもこういった使い方、図書館できますよということを自信を持って言えていくと思います。そういう好循環を、そういう仕組みを作っていただくといいのかなというお話だったかと思います。

豊田副会長 市民意識調査をされましたけど、自由回答がいっぱい出てくるじゃないですか。大体それって無駄になってしまうことがかつては多かったですけど、これを全部生成AIに読み込ませて、要するにどういうことか、そういったことを整理させるとすごく上手に使えるので、そういったこともちょっとお薦めしておきたいです。ワークショップの議事録とかも全部そういうふうにすると、有効に活用できるので、そういうこともやりながら、その意見を取り入れるというのもやっていかれるといいのかなと。

清尚子委員 ちょっと過去を振り返ると、15年、10年くらい前の「人を減らせ」という政府の政策で、公務員をどんどん減らせということで、外部委託できるものはしてしまうとか、そこは図書館の中では阻止できましたが、職員をぐっと減らして、非常勤がぐっと増えたじゃない

いですか。前回の会議でも問題点として、ハード面としては建物の老朽化、ソフト面で職員の研修というか、レベルアップが挙げられていましたけど、ビジョンを作るに際しても、日々の利用者との対面、今、電子図書館が始まって、これについても、電子図書館で楽になるかという、利用者を増やさなければいけないし、学校と連携しなければいけないし、そこでもこういうデータをもとに、いろいろやることが多いじゃないですか。会計年度任用職員の方たちが日々の回転を全部やっていて、正規の職員がこのようなビジョンを立てたり、やるというのもすごく大変なことだと思います。非常勤職員がコロコロ変わるじゃないですか。それを管理するのも大変だし、毎年募集するのも大変だし、そういうなかでこういうビジョンを立てたり、過去を振り返ってみて将来どういうふうにしていくかという計画、この大元になる職員の大変さが、なんとなく見てわかります。ですからビジョンの中に、職員体制を入れて欲しいと思います。

事務局（中央図書館長） おっしゃるとおり、職員のスキルをより向上させるというのは大変重要なことで、そこはまさに今もんでいる中で、これ大事だよねというのは出ておりますので、何とか形になるようにしたいと思います。

事務局（教育局次長） 今のアドバイスの中には二面性があると思います。一つは現場でのいわば図書館としての事務的なスキルの部分と、あと行政的な企画立案、将来的なビジョンの話もそうですけど、その部分のスキルの二面性が多分あると思います。

やはり会計年度任用職員は任用の関係で仕方なくそういう状況にはなっていますが、そこをうまく生かすためのスキルは、現場にとって絶対大事なことだと思うので、これについてはできる限り早く考えていく必要がある。基本的に全体の事業としてこれだけの館を運営してやっていく以上は、やはり計画的なものとか、今後の将来的な部分を見据えて進めていくという形は、基本は企業的な部分の目線になりますけれども、そういった部分では必ずそれがないと方向がぶれるということがありますので、それについては正職員側の方でできるように、これは私も頑張らせていただきたいなと思います。

昨年 11 月 29 日に教育大綱が静岡市で新たに示されました。その中で一つ大事なことはウェルビーイング、幸せの度数ですね。幸せっていうようなところの中で、図書館は今までは多くの本を読んでもらうのが非常に良いという形で、各地域にいろいろ点在をして展開をしてきたという昔ながらの考え方と、今は、中央図書館とか御幸町図書はちょっと違うかもしれませんが、各地域にある図書館は憩いの場、あとコミュニティというところの部分、コミュニケーションというところの部分の要素に、プラススクオリティオブライフという形で、生活の質をあげましようとか、豊かなところで寄与する場所とか、機能として求められるものが変わってきたのかなということがあなかで、先ほど豊田

委員の話もありましたけど、そういうところにフレキシブルに対応するという部分のところも、多分今までの図書館にはなかった考え方だと思います。

ビジョン、計画というところすごく大きなことのように思えますが、そういったところをより視覚化しよう、見える化しようというところを、頑張らせていただきたいなというぐらいの理解で、今後これが最終的には教育振興基本計画とかといった形の中でブラッシュアップの中で刷り込まれていくと、それが本来での大きい計画になってくるのかなと思いますので、あまりこのビジョンを堅苦しいものでなく、こういったものが今後図書館に求められるかという目線で見ていただければありがたいと思います。また、今後の進め方等、望月館長とも相談をしながら進めさせていただきますので、よろしくお願いします。

那珂会長 今、教育振興基本計画の話が出ましたが、静岡市としての教育のあり方、方向性、ビジョン、こういったものがその中には盛り込まれて、最終的にはそれを土台にして、図書館は市のビジョンを実現するために、図書館の役割をどのように具体化していくのかということだと思いますので、策定する場合にはそういった視点をもっていただきたいと思います。

憩いの場として、あるいはコミュニティを形成する場として、あるいは人が豊かになる場としての図書館という、そういう大きい流れというのがあろうかと思いますが、ただ一方で、先ほどの市民意識調査では、図書館に求めている今現在の市民の意識の中では、会話ができる環境は静岡市の図書館ではあまり求められていないのかなあという結果です。こう考えると、方向性としては全体としてはそう形成するのが図書館の新しい役割というのは教科書にも書いてありますし、大学でも僕はしょっちゅう言っていますが、学生に聞くと意外とそうじゃないという反応を実は示してしまっていて、やっぱり読書空間、しかも静かに読める読書空間を求めているという若い人は意外とそういう感覚のかな。多分コロナの影響があって、中学生、高校生のときに図書館で勉強できなかったという思いを持っている学生さんだと思うので、余計図書館でいろいろ本を読みたいという意識が強いのだと思います。全体の流れはあるけれども、一方で実際の現実の図書館に求められている市民のニーズでもあるので、そちらの方もバランスよく見ていただかないといけないのかなあと思います。まさに臨機応変というか、そのときそのときの状況で、どっちにでもいけるような、そういうフレキシブルな対応が多分求められると思いますし、だからといって、図書館職員の専門的なスキルが駄目だと言っているわけではなく、それがないと本と人を結び付けられませんので、基本のところは押さえておいてもらいたいなあという何でもかんでもという要望にはなりますが、個人的にはあまり図書館というものの理念というものを大きく崩してもらいたくないという気はします。現状はこうで、将来はこうやってこういうことが求められるよというところに大きくぶれてしまう

と、じゃあ図書館って一体何なのというところの根本的な問題になってしまうので、そこはぶれないでもらいたいという意識を、実は持っております。

清尚子委員 平成 29 年の「静岡市立図書館の使命目的とサービス方針」が、ホームページの運営方針にうたわれていますが、これも私たちは図書館のよりどころにしてきたので、ビジョンを生かす中では、まず三つ書かれていて、「知る自由を守る図書館」「市民の暮らしや仕事・まち作りに役立つ図書館」「学びを通して様々な個性が育つことを助ける図書館」、ぜひこれをビジョンの参考にして欲しいです。

本年度の文科省の補正予算で「図書館学校図書館と地域連携協働による読書のまちづくり推進事業」というのに 5,000 万ほどの予算がつきました。この事業で、「図書館が地域の課題解決支援サービスの提供、交流拠点やにぎわいの中心として地域活性化に資する」とうたわれています。今回の質問で、「人口減少に対する図書館のあり方」と聞かれて、私は真っ先に「これサービス削るんだな」と思ってしまいましたが、人口減少で、地域のサービスをどんどん削っていくと、それこそ地域の人たちの活性化は全然求められないので、減少に歯止めをかけるどころか進んでいく要素になるんじゃないかなと思います。今書店がなくなって、書店もないし、図書館もないという所だと、地域の人たちの拠り所というか、豊かさというのが、生活がどんどん下がってしまうと思うので、ぜひこういう文科省の傾向とこの運営サービス方針を参考にビジョンを作ってほしいと思います。

森委員 私は音訳ボランティア「フレンド」で、清水の図書館で録音図書を作って置いていただいて、貸出しをしていただいています。南部図書館や中央図書館の音訳ボランティアは図書館が立ち上げて作ったグループですが、私たちは清水市の頃に、図書館を建て替えるときに、先輩たちが図書館に対面朗読や録音図書を作るための部屋を作ってほしいとお願いしたので、立場が違う。合併して静岡市になりましたが、ちょっと立場が違うかなとみんな思っています。「そもそもの始まりが違うからだね」と言ったり、担当者が 3 年ぐらいで変わるたびにその対応が違ったり、「理解してもらえてないね」という意見が出ていますが、何かよくなってほしいなって個人的なグループとしての意見として、一応お伝えしておきます。

那珂会長 図書館に関わっている方々、団体の方々、ボランティアの方々も静岡市の図書館を良くしていきたいという思い、あるいは静岡市民の知的な環境整備に協力したいという思いは同じだと思いますので、そういった皆様にも情報共有していただきたいと思っております。

宗野委員 これから人口減少していく中で、どうしたらサービス向上になるのかなあと思ったときに、自分はヘビーユーザーじゃないけど普通に利用していく中で、静岡市内のいろんな図書館を回りますが、この図書館だったらこれが強いって何か特色があった方が、面白いなあと個人的に思って、例えば清水だったらサッカーの関係の本が山ほどあって、もう見切れないよ、そこに全部あるよとか、例えば北部だったら、この先の南アルプスの資料が山ほどあるので、そこに行きたいときはそこで 1 回読んで勉強してから行くとか、海沿いの図書館は海の本があって、夏休みに子どもを連れて行くという勉強できるみたいな方が、いろんな図書館に行くのが楽しくなるかなあっていうのはちょっと考えました。あと自分が借りていて、新刊とかがあるときにタイトルとジャケットを見て読もうかなと思いますが、よく本屋さんにあるようなポップみたいなものがあったりすると、新刊なんて知らない作家さんの本を見たりする可能性があるのも、そこで本屋さんみたいな形でやっておくと、意外と新刊でも借りられる本がどんどん回っていきなりあるかなと思うので、その作業は司書さんがちょっと大変なんだろうなあと思いますが、今までとはちょっと違うことをやっても面白いかなあ。この間図書館でおすすめの本で何が入っているかわからないみたいなことをやっていて面白いなと思ったので、いろいろ当たり外れや失敗はあると思いますが、まずは野球で言ったら打たなきゃホームランは打てないし、いろんなことをいろいろな図書館でやっていただければなとは思っています。

那珂会長 なかなか図書館職員の方だけで全部やるのはやっぱり難しいし、今現在も既に仕事はいろいろ大変だと思いますので、プラスアルファというのはなかなか難しいとは思いますが、利用者をどんどん巻き込んでもいいかなと思います。意外と一般の利用者も、本を紹介してくれと言われれば、いくらでもしたいと思う人もたくさんいると思います。北部図書館でもそういうイベントをされるということで、後でご紹介あると思いますが、一般の方を巻き込んで協力していただくということも、おそらくそこにはお金もかかりませんし、もう本当に教えたくて教えたくてしょうがない人、ただでいいから教えたいという人はたくさんいらっしゃると思いますので、そういったこともできるのかなと思いました。

加藤委員 私は「子どもの本を読む会」というのに所属して、静岡市立図書館と共催で「子どもの本を学ぶ講座」というものを継続的にやってきましたが、コロナ禍もあるし、参加者の年齢層が本当に上がってきて、若い人たちの参加は単発的というか、年度で興味のある講師の内容だと参加してくれる方もいらっしゃるんですけど、継続的な学びを続ける

っていうことを考えると、本当に年齢層が上がってきていて、私たちボランティアも非常に危機感を持っています。

なので、私たちも協力をして市民サービスをしていくことを継続したいけれども、その継続が今ちょっと難しくなっている。どの分野もそうですけれども、仲間で毎月おはなし会をやっている人たちも、人数が減ってきて、その配分もなかなか難しくなっているという話を聞くので、現状として、一緒にやりたいことはやりたいけれども、協力できる方々の養成とまではいかないんですけれども、結構難しくなっていることをひしひしと感じているこの頃です。

那珂会長 なかなか人材不足ってところが現実味を帯びて、これも結構前から言われてきていることですが、かなり現実的になってきているというマイナスの側面だけ見ても多分しょうがないので、プラスのいい部分を少し皆さんと一緒に探していきたいなと思います。

加藤委員 南部図書館でやっている「子どもの本を楽しむ講座」も、南部図書館主催だと託児を無料で受けられる講座ですが、去年は託児分の定員がいっぱいになって受講をした方がいるけど、今年度は無料の託児が定員になってなくて非常に残念。広報の仕方とかいろいろあると思いますが、若いお母さん方は皆さん、本当に関心を持っていると思うんですね。それがやっぱり時間とか継続的にそういう講座を受けるっていうのが難しくなっているのかなって思いました。

伊澤委員 私立の園長をやっています。2025 年問題で少子化がどんどん進んでいくということで、未来のビジョンを立てるのはすごく難しいなと思っていて、私どもは年齢が限られていますけど、図書館は0歳から 70 歳以上の全ての方に良い場所作りとなると、とても難しいなと思って、今話を聞かせてもらっていました。電子図書が小学校で子どもたちが知る機会があるというのは、その子たちが大きくなったときに役に立つだろうと思うし、山間地や体が不自由になって図書館に行けなくなった方には移動図書館が必要だし、限られた人材またその質の向上も多分求められていると思うんですけど、官だけではなく民官が協力していけば、すごくより良い社会になっていくのかなと思って聞きました。

すごくいいことをたくさん各図書館でやっていますが、それを知らない人が多いのがもったいないと思うのと、おはなしの会に職員が勤務時間に行って学ばせてもらっています。こんなふうな読み方があるとか、やはりそこに追求されているのでとても勉強になって、それを子どもたちに返したり、あと「おしゃべりサロン」って言って、一般のまだどこにも属していない親子さんが今すごく増えているんです。育休が取れるようになったの

で、そういう方たちが、保育園のそういうサロンに来た時に、もし来ていただけると、そこでまた広報にもなるし、その保護者と子どもにもいいし、こども園とかそういう所も、少しずつ豊かになっていくと思います。やっぱり教育が豊かなところに人は集まってくるので、静岡市の人口が減っているのもそこもあると思うので、本当にいろんな人がいるので、子どもから発達障害の子もいるし、目の見えない子、耳の聞こえない子も含めて図書館が教育の発信、「静岡ってこんなにいい教育をやっているよ」みたいになるといいのかなと、話を聞いていて思いました。感想ですけど、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

那珂会長 人にやさしいというか、普段あまり使わない言い方ですけど、人間愛に満ちた静岡市。今もそうだと思いますし、これからもそういう人を大事にする市になってもらいたいし、図書館になってもらいたいなあと、今お話をお聞きして思いました。

(4) その他(人口減少)

那珂会長 それでは以上で議題の方というか資料の方につきましては終わりましたが、最後に今日もいろいろお話が出てきましたけれども、人口が昨今少子高齢化で減少している中で、図書館がこの先確実に利用者が減ってくるわけで、これはもう間違いない現実です。そういう中で、図書館として今後どういうサービスを提供していったらいいのか、していかなければいけないのかについてのご意見を皆さんから頂戴したいと思っています。人口減少が進む中で、図書館がどのようなサービスを今後提供するというところ、多分ネガティブな話にすれば、こういうサービスを切るとか、資料費がどんどん下がっていても人口減少だから、利用者もしようがないよねという話になりますが、できればポジティブな未来志向的な建設的なご意見を頂戴したいなと思っています。時間も限られていますので、10分、15分ぐらいの時間しかございませんが、こういったサービスを優先的にやってもらいたい、こういったご意見あるかた、ぜひよろしくお願いします。

堀川委員 人口減少ということを考えるということも非常に大切なことだと思いますが、前回も言いましたように、人口が減っていくのに対して、登録者や利用者がどのくらいいるかっていうところですね。まず一つ目は利用統計を生かして、新しい顧客の開拓っていうものが重要じゃないかなと思います。二つ目は先ほどから皆さんから出ていますけれども、各施設ですとか、学校とか地域とか、文化施設とか、社会教育施設とか、御幸町図書館は歴史博物館とコラボしたりしたいへん良いことだと思いますけれども、そういった関係団体や民間との連携協力というコラボ、そういったものを進めていくこと、三つ

目は電子図書館については、やはり郷土資料の電子化ですよ。それはやっぱり今後
のことを考えると進めていく必要があるのではないかと。

昨年11月に行われた静岡県図書館大会の第2分科会に出席したのですが、「つ
ながる信州の図書館」というテーマでやった中で、「信州における価値ある地域資源
の共有化を図り、新たな知識化・発信をとおして、地域住民の学びを豊かにし、地域創
生に繋げていく」というようなことを話されていました。その中で駒ヶ根市の東伊那公民
館の区誌編纂の例をあげていましたが、地域資料のデジタル化を推進して、地域の大切
な宝を後世に残していくということで、ボランティアの協力などを得ながら進めている
というお話がありました。いろんな事例があると思いますので、参考にしながら進めてい
かれたらいいなと思いました。

那珂会長 行政文書や地域資料のデジタル化は、もし僕でよければ、学生さんとか学校とか、ど
んどん協力できると思いますし、大学あるいは地域の学校、高校なんかも地域を知るっ
ていうところでは、かなり力を入れてきていますので、そういった方向性も含めて、積極
的に連携をしていただくとういうこともできるのかなあとと思います。

清俊之委員 人口減少って、そのテーマに合うかどうか心配ですが、ネガティブに考えれば、先細
り、しりすばみの縮小というイメージがあると思いますが、学校現場も子どもの数が減っ
てもう数十年たった中で、変化を求められつつですが、子どもたちや若い世代に文化
的なとか豊かなとか、そういう種まきのつもりで、いつまでも子どもじゃないので、数十
年たってここにある推計の2050年とかその頃には、今の子どもたちが大人の立派な
中核になって、世の中を動かすような世代に入ってくるわけで、そういうときに向かっ
てしりすばみ感、閉塞感を抜くためには、やっぱり図書館だとか、文化に触れる機会とかコ
ミュニティの機能を持って確かそうだと思うんですよ。ただ元々公民館と言っていたも
のが生涯学習交流館という形になって、これは藁科図書館もその交流館の機能の中
の一部に入っていると考えれば、従来の図書館の機能と、そこに行けば人と出会える
とか、人の気配がするとか、自分もあと20年経ったらどうなっているのだろうとか考える
と、図書館に行きたいけど、車を運転しなくなった、ひとりになった、コミュニティにいけな
いとか、そういうことを考えると、移動図書館の機能とかタブレットだとかいろんな選択
肢が用意されていて、自分で選べる状態が定着するというのがすごく大事な事かなと
感じるんですね。

どの世代にも魅力があったり、どの世代も知っているということの定着を見るのが、
一番必要な事かなと思います。子どもはやっぱり本が好きなんですよ。そういう子ど
もたちを義務教育が終わって外へ出していくってことが、種まきの状態なのかなっ

て、ぜひそういう意味では未来志向とかねそういうところが大事かなって感じます。ぜひ縮小感ないといいなと思います。

伊澤委員 働く人の数も減っているということも忘れないようにして、AIとかそういうものを活用しながら運営側が工夫して、でもやっぱり対面のところは、変わってはいけないところはあります。文化を守るところ、きちんと守るところと変わっていかなくてはいけないところを区別していけば、図書館の質は守られていくのかなと思うので、変わることが苦手な人もいますが、そこを頑張ってAIとかICTとかも駆使しながら、働く人も減っていくので、予算も上手に、難しいとは思いますが、経験と質をあげるところで上手にやっていただければと思います。

豊田副会長 人口減少ってそこからまたいろいろ影響があるので、どの部分に焦点を当てるかによって考え方が変わってくると思うんですけど、多分人口が減るとコミュニティのあり方というか質そのものも変わってきて、その中に例えばICTをどういうふうに使っていくのだろうかとか、対面の部分ってどんな形であるのだろうかとか、いろいろ変わってくるのだろうなと思うんですね。

この間静岡市の情報化を担当しているセクションで、市民のデジタルリテラシーを上げるためのボランティアを養成するという講座をやっていて、私の妻が参加しました。そういう課でやるのはいいことだと思うんですけども、でも住民の情報リテラシーを全体に上げていって、そのコミュニケーションのあり方みたいなものを、新しい時代に合った形にしていくというのは、私は図書館が一番向いているのではないかと実は思っています。そういうことを考えたときに、図書館で会話をするとか、静かな方がいいかはちょっと表面的な話であって、こんなふうな対話のバランスの図書館が作られると、コミュニティのあり方にも非常にプラスになるのではないかなというようなことを考える必要があるのかなと思います。

那珂会長 そろそろお時間になってしまいましたが、今日はかなりいろんな意見が出ましたし、お話ししていただきましたし、今後の図書館のあり方、電子図書館、デジタル化も含めてですね、人口減少に当たって図書館がどういう方向で進んでいくのか、そのビジョンをどうするのかっていうところについて様々なアイデアはたくさん出たと思いますので、ぜひ持ち帰っていただいて、できれば次回の図書館協議会のところまでに、進捗をお聞かせいただきたいというのと、具体的な目標ですね、特にビジョンの策定については、いついつまでに何をしたいぐらいの大きい目標まではいただきたいと思っております。具体的な計画は次回までは難しいかもしれませんが、いつまでに何をするという期限

みたいなものを設けないと、議論も進んでいかないでしょうから、進捗と大きい目標設定のところは、次回の協議会のところでご報告いただきたいと思いますと考えております。

それでは以上で本日予定していた議題は終了いたします。追加のご意見、ご質問や昨年 11 月の静岡県図書館大会に参加された際のご感想、ご意見などございましたら、協議会終了後、ご意見を賜りたいと思いますので、個別によろしくお願いします。それでは本日はこちらで終了したいと思います。議事進行につきまして、ご協力をいただきまして誠にありがとうございました。

8 閉会